

<学会記事>3. 一農村地区の40~59歳成人における齲蝕と歯周疾患について(第5回東北大学歯学会大会講演抄録)(一般演題)

著者	田浦 勝彦, 島田 義弘
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	3
号	1
ページ	60-60
発行年	1984-08-15
URL	http://hdl.handle.net/10097/31141

と第三大臼歯間すべてにわたり相互関係が認められる(危険率1%)。

3. 一農村地区の40~59歳成人における齲蝕と歯周疾患について

田浦勝彦, 島田義弘(予防歯科)

宮城県の北東部の一農村地区である大郷町の成人について、齲蝕と歯周疾患の有病状況を知る目的で、40~59歳の310名を対象に視診型の歯科検診を行った。

昭和58年8月の町民総合検診時に、対象者を歯科用簡易椅子に坐らせ、昼光灯の人工照明下で、air syringeと平面歯鏡と規格化した鋭利な歯科用探針 Welstone No.9を用いて齲蝕診査を行った。歯周疾患に関しては、交互両側半口腔法を採用して診査部位を限定した。先ず、pincetで歯の動揺を診査し、次にポケット探針(Nordent社製)を用いて、RussellのPeriodontal Index(以下P.I.と略す)の基準に若干の補足を加えて評価した。得られた成績は次の通りである。

1) 現在歯数、喪失歯数、未処置歯数については、男女間に統計学的有意差を認めなかったが、女性の処置歯数ならびに未処置歯数と処置歯数の合計は男性より4.1~4.8歯多く、その差は有意であった。

2) 歯の動揺については、上下顎の切歯群が多かった。動揺の程度は軽度 m_1 が圧倒的に多く、高度 m_3 は40歳代の4歯、50歳代の16歯に認められた。

3) 歯種別P.I.値については、下顎切歯と上顎大臼歯が高く、上顎犬歯と下顎小臼歯が低かった。交互両側半口腔法によるP.I.値については、男性が女性より約0.8高く、その間の差は統計学的に有意であった。

4) 歯周疾患の進行度をP.I.値によって群別したところ、P.I.値が0.2異常の明瞭な歯周病患者は40歳代の66.7%、50歳代の90.8%と多かった。このことから本調査対象においては、歯周疾患についての適切な処置と保健指導の必要性が痛感された。

4. 乳歯の異常ならびにその後継永久歯との関係について

濱田芳隆, 広瀬寿秀, 高橋章子, 五十嵐公英
神山紀久男(小児歯科)

乳歯癒合と先欠の発現頻度、発現部位およびその後継永久歯に現れる異常について調査した。

対象は、本学小児歯科外来を訪れた患者で歯齢IIA及びIIC期の口腔内写真、模型、既往歴から、乳歯の存

否の確認できたもの866名である。全身的な異常、口腔の奇型を持つもの、および多数歯欠如を示す者は除外した。模型上で反対側正常歯と比較し、大きいものを癒合、等しいか小さいものを先欠と判定した。

乳歯列異常の発現頻度は、癒合48名、5.5%、先欠18名、2.1%でこのうち3名は重複していた。癒合、先欠共に下顎に有意に多かったが、性差、左右差は認められなかった。部位別には、癒合が、 \overline{AB} 37歯、 \overline{BC} 14歯、 \overline{AB} 2歯、先欠は、 \overline{B} 18歯、 \overline{B} 2歯、 \overline{A} 1歯の順に多く認められた。

乳歯が異常で、その後継歯が異常である頻度は、 \overline{AB} 癒合では21歯中3歯、 \overline{BC} 癒合では8歯中7歯、 \overline{B} 先欠では14歯中13歯であった。

片側異常症例の \overline{AB} 癒合29名、 \overline{BC} 癒合10名、 \overline{B} 先欠9名についてみると、 \overline{AB} 癒合歯では唇舌共に縦走溝があり大なるものから、癒合線が認められず正常側 \overline{B} の幅径に近いものまで、形態や幅径に変異が認められたのに対し、 \overline{BC} 癒合歯では唇舌共に縦走溝があり幅径は著しく大なるもののみであった。 \overline{B} 先欠では異常側 \overline{C} は反対側 \overline{C} より小さく、近心半は \overline{B} 、遠心半は \overline{C} 様の形態を呈していた。

資料の中に、下顎 \overline{B} の先欠で、後継は $\overline{23}$ の癒合をみた症例があった。このことは、先欠側の \overline{C} が \overline{BC} の癒合歯ではないかとの疑いをもたせる。但し、これについては、今後の研究を待ちたい。

5. tapping頻度及び咬合力の変化が咬筋筋電図に与える影響

三浦周太郎, 宗形芳英, 高藤道夫, 渡辺 誠
鹿沼晶夫(歯科補綴2)

顎口腔機能検査法の1つに筋電図がある。今回、我々はtapping運動に伴うEMGがtapping頻度及びtapping時の咬合力の変化にともない、どのような影響をうけるか検討した。

正常有歯顎者の成人男子7名を被験者とし、0.5 Hzから7 Hzへ6段階に変化させた音信号に合わせてtapping運動を行なわせた。tappingに伴うEMGは左側咬筋から表面電極で双極導出し、この時咬合力も同時記録した。tapping時の咬合力はすべての被験者において、tapping頻度の上昇に伴い一様に減少した。そこで、各tapping頻度で得られた咬合力を基準として、その0.5倍から1.5倍へと咬合力を増加させた時のEMGの変化を観察した。これらの実験より得られたEMGを分析して以下の結果を得た。1) Silent